

理想の保育者の資質について②

西 本 脩

前回は、理想的保育者の資質として必要と思われる諸条件のうちで、身体・容貌・言語等の外的な条件と、内的な条件としての能力・学識等について考察しました。今回はそのつづきとして、内的な条件のうちの人格・性格的な条件から考えていくことにしましょう。

2、人格・性格的条件

他の諸条件がたいして重要ではないというのではありませんが、私はこの「人格・性格的条件」が、よい保育者にとっては、他の条件より以上に、もっとも重要な根本条件であると思います。たとえ、どんなに身体が健康で、学識や教養もあり、保育の技術においてすぐれていたとしても、もし人格的に欠けるところがあったり、性格がゆがんでいたりしたのでは、よい保育者とはいえないでしょう。保育は生きた保育者の人格と、生きた被保育者(幼児)の人格との直接の触れ合いにおいて行われるものです。このお互いの人格の触れ合いを通して、幼児は保育者の人格からよい影響も悪い影響もともに受けるので

す。したがって、人格的に、性格的にすぐれていることこそ、よい保育者たる根本条件です。この大切な条件について、もう少し具体的に考えてみましょう。

(1) 教育愛に燃えていて、献身的に幼児のために奉仕すること。

保育者はまず何よりも、子どもを愛する人、子ども好きな人でなければなりません。

子どもたちが楽しそうに無心に遊んでいるのを見ると、つい自分もいっしょにその中に入って遊びたくなるような気持をもっている人、幼児がハナをたらしめているのを見てかんでやったり、汚したおしりの始末なども楽しくしてやれるような人、病弱な子ども、手足の不自由な子ども、知恵の遅れた子ども等の恵まれない子どもたちを見て、何とかして救ってやりたいというような母性愛にも似た衝動にかられる人でなければ、保育者には適さないでしょう。よい保育者は、内に燃えるような子どもに対する愛情を持っていなければなりません。そして、幼児の幸福のためには骨身をおしずみ働くことのできる人でなけ

ればなりません。

(2) 幼児をよく理解し、深い同情をもっていること。

ただ感傷的に、幼児は無邪気かわいいか、天真爛漫な子どもが好きだとかいうだけでは、真によい保育者となることはできません。このようなセンチメンタルな愛情は、往々にして、本能的な母性愛と同じく、盲目的な愛情・溺愛になりやすいものです。その結果、ただ子どもを無茶苦茶にかわいがり、あまやかしたり、世話をやき、かばい過ぎて、大切なしつけをおろそかにしてしまうことにもなります。よい保育者は、幼児の心身の成長発達過程や個性をよく理解し、一人ひとりの幼児の価値可能性を信じ愛して、これを十分に発達させるために、あらゆる教育的叡知と教育技術をつくす愛の科学者でなければなりません。真の保育者の愛は、単なる本能的な母性愛ではなく、理性を通じた冷厳な愛とでもいべきものでしょう。

(3) 明朗快活であって、若々しい精神をもっていること。

保育者は、いつも発刺として活動的な幼児

たちを相手として、ともに活動し、生活できる人でなければなりません。したがって、肉体的にも精神的にも若さが必要です。たとえ、肉体の年齢は若くなくとも、精神的に若々しい人はよろしいが、精神的に老けている人は困ります。子どもといっしょにかげまわったり、活動することが億劫で、椅子に腰掛けたまま、身体をあまり動かさずにするようなことばかりをやらせる先生や、割合に暖かい冬の日、子どもは少しも寒がらず、外へ出て遊びたがっているのに、自分が寒いので、室内ばかりで過させようとする先生に受け持たれたのでは、子どもたちは活動欲を十分に満足させることができず、精力がありあまっているために、ついいたずらやけんかをして、騒がしくなることでしょう。また精神的に老けている人は、まめに動くことが億劫なため、自由保育の名のもとに子どもを放任しておいたり、頭が古く、しかも頑固なために、昔ながらのつめ込み的な保育を子どもに押しつけたりしがちです。保育者は、子どもとともにいつもビチビチした若鮎のような発刺とした気持を持ち、まめに動きまわるこ

とができ、しかも幼児とともに自身も絶えず成長しようとする若さを持つていなければなりません。年寄りくさいのや、かたくなな心の人是不適當です。また保育者は、いつも明朗で快活であることが必要です。保育者の気持の持ち方はすぐに、幼児の心や行動に反映します。先生が明朗快活ですと、その組全体の雰囲気明るく、子どもたちも快活でのびのびとしています。ところが、受持の先生が陰気な不明朗な気むすかし屋であったりすると、その組の子どもたち全体が暗い、いじけた、幼児らしくない気持になってしまします。したがって、よい保育者は明朗快活な性格を持つことが大切です。

(4) 寛容であって、気ながに、親切に幼児を指導すること。

幼児を相手にする保育者は、またやさしい人でなければなりません。よい保育者は、やさしい人ですが、ただ何でもかんでも子どもに甘いというのではなく、幼児期にしっかりとおくべきことはきちんとしつけ、指導すべきことは指導します。また注意を与えるべきときには、見て見ぬふりをしたりせずに、ちゃ

んと注意を与えもします。けれども、これらのことは、真にその子どもの将来を思つてされるのであって、決して単なるあらさがしや小言のための小言にならないように注意します。感情的にカッとなって叱るようなことはせず、いつも根気よく、冷静な態度で、やさしく親切に、子どもに納得のいくように話して聞かせるような導き方をします。感情的な人、ヒステリックな人、気短かな人、厳格すぎる人、甘やかし過ぎる人はいずれもよい保育者とはいえません。

(5) 人格的権威をもって、幼児から信頼され、幼児を指導する能力をもっていること。よい保育者が人格的な権威をもっているというのとは、決して偉らそうにしているとか、お高く止っているということではありません。幼児たちに、近寄りが見たい先生、こわい先生というような気持を持たせて、心理的にはなれてしまつたのではだめです。幼児たちから、本当に友だちのように親しまれ、いっしょに遊びもするが、なおただ単なる遊び友だちとは違って、どこことなく子どもたちから信頼される、頼りにされるような人格特性を

もっていることが必要です。保育者は、幼児と生活をともにできる人でなければなりません。幼児のいうまま、思うままになる単なる仲間ではなくて、幼児を指導する任務と責任を負わされている人です。したがって、幼児に対する指導性を持っていなければなりません。また幼児ばかりでなく、その両親・祖父母等の家族の人びとの教育も、おりにふれてしなければなりませんから、これらのおとなたちからも信頼を受け、彼らをも指導できる能力を、あわせて持つていることが望ましいと思ひます。

(6) 冷静沉着であつて、感情を神経質に表現しないこと。

毎日の保育においては、愉快なこと、楽しいことばかりではありません。ときには、思いがけないできごとのために、肝を冷やす思いをすることもあつてでしょう。地震・嵐・火事などの天災や人災、あるいは、子どもの大げんか、いたずら、怪我、急病、事故などに出くわした場合には、保育者が青くなつて氣を失うばかりになつたり、興奮して、ただ右往左往し、周章狼狽したのでは、幼児たちはどう

してよいのか分らず、先生といっしょになつて右往左往して被害を大きくしたり、こわがって泣いたりするだけでしよう。保育者はいづいかなる場合にも、冷静に落ち着いて、適切な処置を考え、実行するだけの心のゆとりを持つていなければなりません。また子どもを叱つたり、注意したりするときでも、感情的になつて興奮したりしてはいけません。感情的になつて怒りますと、幼児は、自分のしたことが間違つていた、悪かつたと反省する氣持よりも、先生に対する反抗心や憎しみの氣持の方が先に立つて、これだけが後まで残ることになつて、せつかくの叱つた効果がなくなつてしまふものです。また同じことを子どもがしているのに、ときによつて叱つたり、見逃したりするような、しつげに一貫性のない態度をとる先生、いわゆるお天気屋の先生、ヒステリー性格の先生はもつともよくない保育者といえましよう。

(7) 保育の仕事に熱意を持ち、喜びをもつて努めること。

よい保育者は、とにかく、保育の仕事に熱心な人、教育的情熱をもつた人でなければなら

りません。計画性のないその場限りの行き当りばつたりの保育や、その日暮しのマンネリズムの保育を日々行っているのでは、どんなに長年勤めても、よい保育者にはなれません。保育の仕事は、誠に地味な「縁の下」の力持ち」的な仕事です。その効果はすぐには現われず、二、三十年後に幼児が成人した頃になつてはじめて現われるようなものですが、人格の基礎を形成する重要な幼児期の保育の仕事で、自分は受け持っているのだと考えますと、非常に重い責任を負わされていることを痛感するとともに、他の職業では味わうことのできない喜びをも感ずることでしょう。保育者は、日々新たな気持をもって、幼児とともに学び、幼児から学び、幼児とともに成長し、誠意をもって、与えられた仕事に最善の努力を傾けて励む人でなければなりません。

(8) 精神的に健康であること。

前に、よい保育者であるためには、身体的に健康であることが何よりも大切であること述べましたが、それとともに、あるいはそれ以上に重要なのは、精神的に健康であること

とです。というのは、前にも述べたように、保育者の人格はただちに幼児に反映するものだからです。ところで、精神的に健康な人とはどういう人でしょうか。考えようによれば、今まで(1)から(7)までに述べた条件を全部そなえている人がそうだといえるかも知れませんが、ここで簡単に述べてみたいと思ひます。

第一には、毎日の生活に楽しみを持ち、日の問題を喜びをもって処理していきます。自己の欠点や短所もよくわきまえていられるので、率直に事態を客観的に眺めることができます。いわば満ち足りた幸福な人生哲学をもっている人です。

第二には、情緒が安定しています。自己に対して信頼感を持ち、自信があるので、喜怒哀楽が極端に走って取り乱すようなことはありません。豊かな心の弾力性、柔らかさを持つていて、他人の考えも受け入れて、交事にあつても騒ぎません。自己の希望や衝動や欲望の間に調和がとれていて、一貫性を示します。

第三には、自己の能力を最大限に發揮しま

す。人生に喜びを感じ、自己を信頼することができるので、仕事をする場合にも、全力をあげることが出来ます。毎日の仕事に合理的な熱意を示し、その成果はあがり、自己が進歩していくという感じをもっています。

第四に、精神的に健康な人は、社会的に受け入れられ承認されます。私たちは家庭や職場など広く対人関係をもっています。もしこの関係からはなれますと、私たちの社会的存在の意義がなくなってしまうます。この場合、社会的な規範から逸脱して自己の衝動のままに行ふことは反社会的な行動として、人びとから拒否されます。健康な精神の持ち主は、社会の理想、社会目標と調和して自己のいろいろな欲求を統制し、それに適応した行動を示すので、したがって社会から広く承認されます。

もちろん、以上のような条件を完全にそなえるということは一つの理想であります。私たちはこの理想に少しずつでも近づくように努力しなければならぬと思ひます。(つづく)

(筆者は大阪樟蔭女子大学教授)